メディチ家の会計組織に関する一考察

片岡　泰彦

第１節　まえがき

フィレンツェは、イタリア半島の北部・中部の主要都市と比較すると、はるかに後進の都市であった。ヴェネツィア、ジェノヴァ、ミラノ等の諸都市は、12世紀前半には、すでに都市国家として形を確立していた。またトスカーナにおいても、ピサ、ルッカ、シエナ等の方が、フィレンツェに先んじていた。

フィレンツェの発展は、13世紀から始まる。フィレンツェの商人達は、13世紀後半から教皇庁及び南イタリアに進出したフランスのアンジュー家（Maison de Anjou）と結びつく。そして商業活動を活発化させる。

14世紀に入ると、バルディ、ペルッツィ、アッチャイウォーリのような大商社が台頭してくる。彼らは、イタリアのみならず、ヨーロッパ中に、活動範囲を拡大し、国際的規模で商業を遂行する企業へと成長していく[(1)]。

14世紀のフィレンツェは、トスカーナのみならず、イタリア半島における最も繁栄する都市として、商業、金融、産業の中心地となった。『新年代記』（Nuova Cronica）を著したジョヴァンニ・ヴィラーニ（Giovanni Villani）によると、1330年のフィレンツェの毛織物企業は300社に達し、80社の銀行が市内に存在したという。これらの企業家達は進取の精神を保有し、新しい技術を導入したり、考案したりした。彼等は、手形、小切手、振替証書、運送業、保険、複式簿記等を採用し、企業の発展に努めた[(2)]。

しかし、13世紀後から14世紀に入って、急速な経済発展を遂げたフィレンツェは、14世紀中葉になって、危機の時代を迎える。フィレンツェの大商社（コンパニア）達は、ヨーロッパ諸国の国王に莫大な貸付を遂行していた。しかし、百年戦争（1337－1453年）の勃発によって、イギリス国王への貸付金が貸倒れとなった。さらにフランス王フィリップ４世（Phillipe le Bel）が王国全土にわたって、フィレンツェ人の所有する商品すべてを差押さえた[(3)]。これを原因として、ペルッツイ、バルディの二大商社をはじめとして有力商社が続々と倒産した。そして1348年にヨーロッパを襲ったペスト（黒死病）により10万人近いフィレンツェの人口は、約３分の２に減少した。

またフィレンツェの政治制度は、共和制と言えども、民主主義と言えるものではなかった。人民（ポーポロ＝popolo）と言える人々は同業組合（アルテ＝arte）の構成員のみで、他は労働者階級であった。このアルテも大アルテと小アルテに分かれていた。大アルテとは、法律家（公証人）、梳毛（そもう）業、毛織物業、絹織物業、商人、銀行、医師・薬剤師の７つの職業に関する組合で、

高級の富裕層とみなされていた。小アルテは、石工、肉屋、酒屋、大工、左官屋等17種の職業による組合であった。

大アルテの構成員は、ポーポロ・グロッソ（脂太りの人民）、小アルテの構成員は、ポーポロ・ミヌート（ささやかな人民）と呼ばれていた。

大アルテは、フィレンツェにおける政治上、経済上の権力を有し、フィレンツェ市を支配していた。小アルテは、構成員の数が多いのにも関わらず、市の役職になれる者は少なかった。

14世紀中葉のフィレンツェでは、総人口９万人のうち、参政権を有する者は3,000人にしかすぎなかった。すなわち、フィレンツェは、同業組合からなる都市国家で、大衆は国家体制の外に置かれていた。したがって、労働者階級を主とする大衆は大きな不満を募らせていた。暴動はたびたび起こった。最も有名な暴動は、「チョンピの乱」(Tumulto dei Ciompi) である。これは、1378年、毛織物工場の下層労働者達が起こした反乱である。一時は、政権をとることに成功したが、やがて没落した[(4)]。

このチョンピの乱の時、サルヴェストロ・デ・メディチという新興商人であるメディチ家の家族が、市行政長官（ゴンファロニエーレ、gonfaloniere）の地位にあった。彼は下層労働者の味方として、この反乱を支持したと言われている。チョンピの乱の裏には、旧来の大商社の倒産によって弱体化した支配層に代わって権力を得ようとする新興勢力の商人層があった。その商人層の代表者が、メディチ家のサルヴェストロであった。サルヴェストロは、国外追放となったが、メディチ家は民衆の支持を集めることとなる[(5)]。

当時のメディチ家は、２つの家系に分かれていた。サルヴェストロとは別の家系に、ジョヴァンニ・デ・メディチ（別名ジョヴァンニ・ディ・ビッチ、Giovanni di Bicci,1360-1429年）がいた。この人物こそ、その後、長期にわたってフィレンツェを支配することとなるメディチ家の基礎を築き上げた有名な創設者の一人である。

かくして、メディチ家は新興勢力の商人として、フィレンツェを中心に台頭してくるのである。本稿は、メディチ家の歴史を概説した後、メディチ家の会計の特徴の一端を考察する若干の試みである。

第２節　メディチ家の歴史

メディチ家の歴史は、繁栄と廃退、平和と闘争の歴史であった。メディチ家は、ルネサンス期のイタリアの都市国家フィレンツェを代表する大商人のうちの１つであり、金融業と織物の製造と販売を主要な業務として発展したのである。

一説によると、メディチ一族は、アヴェラルド（Averardo）という勇猛な騎士の末裔であるという話がある。しかし、一般的には、メディコ（medico＝医者）の家族（medici）の名前が示すように、ムジェロからフィレンツェに移ってきた医者か薬剤師の子孫と言われている。

メディチ家は、フィレンツェの繁栄とともに栄え、市の有力者となっていった。1296年には、アルディンゴ・デ・メディチという人物が一族では初めて市行政長官（ゴンファロニエーレ）に選出されたと言われている。

ルーヴァの研究によると、メディチ家の金融業を最初に開いたのは、ヴィエーリ・ディ・カムビオ・ディ・メディチ（Messer Vieri di Cambio de Medici,1323-1395年）である[(6)]。ヴィエーリは、1370年には、フィレンツェを代表する銀行家となっていた。しかし、このヴィエーリ銀行は、1391年から1392年にかけて、３つの銀行に分裂した。

第１の銀行は、ヴィエーリの甥アントニオ・ディ・ジョヴァンニ・ディ.カムビオ・デ・メディチ（Antonio di Giovanni di Cambio de' Medici）の経営によるものであった。しかし、この銀行は長くは続かず、1396年には消滅した。アントニオも1396年には没している。

第２の銀行は、フランチェスコ・ディ・ビッチ（Francesco di Bicci）が彼の息子アヴェラルド・ディ・フランチェスコ（Averardo di Francesco）の名前で経営を開始した銀行である。しかし、息子のアヴェラルドが1443年に没したので廃止となった。なお、フランチェスコ・ディ・ビッチは、ジョヴァンニ・ディ・ビッチの兄である。このアヴェラルド・ディ・フランチェスコ・ディ・メディチ銀行は、1395年当時、フランスのパリ、イギリスのロンドン、スペインのバルセロナ、イタリアのヴェネツィア、シエナ、ピサ、ペルージア他等に多くの取引先を持ち、活躍していたのである[(7)]。この1395年のアヴェラルドの元帳については、後に詳述する。

第３が、ヴィエーリ銀行で勤務していたジョヴァンニ・ディ・ビッチ（Giovanni di Bicci,1360-1429年）が始めた銀行である。ジョヴァンニ・ディ・ビッチは、初めはヴィエーリからローマ支店を任されていた。ヴィエーリの引退後、このローマ支店をジョヴァンニの会社として1397年に独立した。さらに、この会社を本店としてフィレンツェに移した。さらにヴェネツィア、ローマ、ナポリ等の支店を開設した。このジョヴァンニ・ディ・ビッチの銀行こそ歴史に名を残す有名なメディチ銀行である[(8)]。

ジョヴァンニは、ヴィエーリ銀行に勤務していたころから、教皇庁と密接な関係を持っていた。特に、後の教皇ヨハネス二十三世（Johannes ＸＸⅢ）となるバルダッサーレ・コッサ(Baldassare Cossa,1378-1417年）と深い結び付きをつけていた。

このバルダッサーレが、1402年に枢機卿になった時も、1410年に教皇に選出された時も、ジョヴァンニは、多くの資金を提供した。かくして、メディチ銀行は、教皇庁の財務管理者となり得た[(9)]。このヨハネス二十三世が、政治的争いに巻き込まれ、廃位に追われ、ハイデルベルク城に幽閉されたことがあった。しかし、ジョヴァンニは、最後まで、このバルダッサーレを庇い続けたのである。そして、メディチ銀行は、創立から20年間で、経営規模を拡大させ、フィレンツェにおける重要な地位を得るに至った。当時のフィレンツェは、ヴィスコンティ(Visconti）家が支配するミラノと戦争状態にあった。そのため、政府は、戦費を売るためカタスト（Catasto）を採用した。このカタストは、後述するように、世帯主の所有財産を申告し、一定率を財産に課税する制度であった。フィレンツェの裕福な大家族達は、この制度に反対した。しかし、ジョヴァンニは、この制度に賛成した。ジョヴァンニは、フィレンツェの政府を支持した。そしてフィレンツェ市民からは、人気を得た。したがって、アルビッツィ（Albizzi）家の様なフィレンツェの権力者達は、メディチ家を敵視していた。やがて1429年２月20日に、ジョヴァンニ・ディ・ビッチは亡くなった。後を継いだのは、長男のコジモ（Cosimo, 1389-

1464年）であった。ただし、ジョヴァンニからコジモへの経営上の引継ぎは、すでに1420年以降に始まっていた。この死亡以前の段階的経営の移行は、極めて成功であった。ジョヴァンニの２人の息子である長男のコジモと次男のロレンツォ（Lorenzo, 1395-1440年）は、共同的かつ友好的に父の仕事を続行したのである[10]。長男のコジモは、後にコジモ・イル・ヴェッキオ（Cosimo il Vecchio＝老コジモ）とも呼ばれ、メディチ家が、分裂する兄派の祖である。また次男のロレンツォも後にロレンツォ・イル・ヴェッキオ（Rorenzo il Vecchio＝老ロレンツォ）とも呼ばれる弟派の祖である。

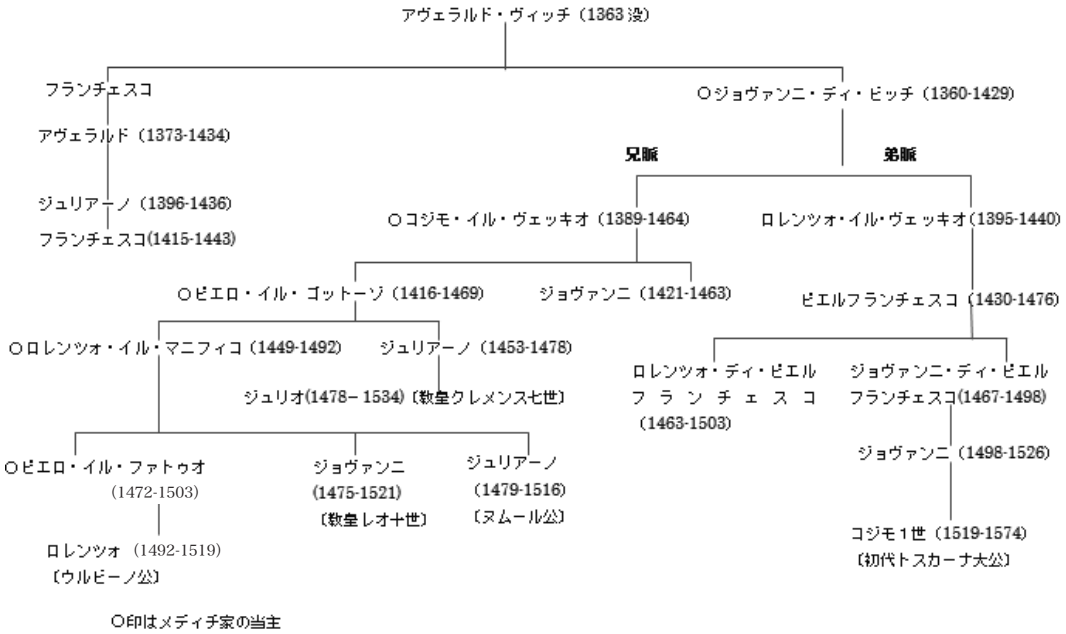
コジモは活動的かつ優秀な人物であった。若い時から、ドイツ語、ギリシャ語、フランス語、ラテン語を学び、人文学的教養を身につけていた。まさにルネサンスの人物コジモは、父に優る経営能力を発揮してメディチ銀行を発展させた[11]。彼は経営者としてのみならず、政治家としても大いに活躍した。

当時フィレンツェでは、アルビッツィ家という大家族が、一大勢力を誇っていた。アルビッツィ家の当主リナルド・デリ・アルビッツィ（Rinaldo degli Albizzi）は、好戦的な人物であった。リナルドは、新興勢力のメディチ家を排除する機会を狙っていた。リナルドは、市行政長官であるベルナルド・グァダーニを動かして、コジモを逮捕することに成功した。リナルドは、コジモの処刑を主張したが、市民の間には、追放説、釈放説も根強く、処刑は断念した。結局、1433年９月28日、コジモは、他の家族とともに、10年間の国外追放と決まった。一時的なメディチ家の崩壊であった。コジモは、弟とともにヴェネツィアで安全な生活を送ることとなった。ヴェネツィアは、コジモ逮捕の時、釈放を求めて特使を派遣したほど、メディチ銀行とは特別な関係にあった。そしてコジモ追放から１年後の1434年９月に、フィレンツェの市民集会は、メディチ家の追放取り消しと、リナルド・デリ・アルビッツィをはじめとする有力者達の追放を決定した。かくして、コジモは、フィレンツェに１年ぶりに復帰した。コジモは、フィレンツェにおける事実上の支配者となった。コジモは、今までの共和制を継続しつつ、一市民としての地位を保ち続けた。さらにメディチ家は、フィレンツェにおける地位を最高のものとした。コジモの政治上の手腕は、メディチ銀行のさらなる経済上の発展を促進した。メディチ銀行は、イタリア国内では、ミラノ、ローマ、ピサ、ヴェネツィアに、また国外では、ジュネーブ、ブルージュ、ロンドン、アヴィニョン等に支店を開設した。さらに銀行のみならず、毛織物、絹織物等の製造と販売、香辛料、工芸品、農作物等の売買取引を遂行した[12]。コジモは、文化的活動にも、かなりの情熱を傾けた。例えば、1439年、ギリシャの東方教会とローマのカトリック教会との合同公会議をフィレンツェで開催した。この時、コンスタンティノープルから訪れたプラトン学者のベッサリンやゲミストス・プレトン等に講演を依頼した。そして、プラトン・アカデミーを私的サークルとして設立した。このサークルから、コジモの侍従医の息子マルシリオ・フィチーノ（Marsilllio Ficino, 1433-1499年）は、一流のプラトン学者として成長する。また、実質的にはメディチの教会となるサン・ロレンツォ（San Rorenzo）教会の完成に努めたのである。1464年８月１日に、コジモは75歳で没した。フィレンツェ共和国政府は、コジモがフィレンツェに残した業績を称え「祖国の父」（パーテル・パトリア＝Pater Patria）の称号

を贈った。コジモの後任として、メディチ家の当主となったのは、コジモの長男ピエロ（Piero, 1416-1469年）であった。ピエロは「痛風病みのピエロ」（ピエロ・イル・ゴットーソ＝Piero il gottoso）と呼ばれるように、病弱であった。そのため反メディチ家の勢力は増大した。反対派の一族には、ニッコロ・ソデリーニ、ルカ・ピッティ、サルヴィアーティ、アッチァウォーリ他、多くの大家族達がいた。1446年８月、反対派は、ピエロを暗殺する計画を実行した。しかし、ピエロの長男ロレンツォ（Lorenzo, 1449-1492年）の機転により、その計画は失敗に終わった。市民集会では、バリア（Balia＝中世都市国家の最高行政会議）の設置が決定し、バリアでは反メディチ派勢力の人々を国外追放とした。病弱だったピエロ・デ・メディチは1469年12月に53歳で没した。わずか５年の短い治政生命であった。ピエロの死後、メディチ家の当主を継いだのは、弱冠20歳の長男ロレンツォであった。ロレンツォは後に、ロレンツォ・イル・マニフィコ（Lorezo il magnifico＝豪華王ロレンツォ）と呼ばれるように極めて活発な人物であった。メディチ家のそれまでの中では、第一級の優れた才能を持った貴公子であった。若い時から、人文主義の教育を受け、ギリシャ語、ラテン語を学び、プラトン、ダンテ、ペトラルカ等古典文学や哲学に造詣を深めた。さらに、美術、音楽等の教養を深める一方、球技、狩猟、乗馬をも趣味とした。彼の頭脳は明晰であり、多くの知識人との交流を好んだ。ロレンツォは、歴代の祖父達が、発展させた制度改革をさらに進め、メディチ家の権力の向上を図った。1466年、ピエロを倒そうとして失敗した一族が兵を集め、プラートを攻略した。ロレンツォと彼を支持する市政府は、フィレンツェ軍を派遣し、プラートを奪回し、陰謀派を追放した。かくしてロレンツォは強い地位を手に入れた。そして1472年にヴェルテッラ（Valterra）で起きた事件でも、ロレンツォは強い指導力を発揮した。この事件は、ヴェルテッラ近郊の明礬（みょうばん）鉱脈の採掘権を有するフィレンツェ商人とヴェルテッラ市政府との争いであった。ヴェルテッラは、鉱脈採掘用地を占拠し、フィレンツェの採掘権を否定した。明礬は、毛織物の染色に不可欠なものであった。ヴェルテッラの民衆が、フィレンツェに対し、反乱を起こしたので、フィレンツェ市政府は、ロレンツォの進言に従い、ウルビーノの傭兵隊長フェデリコ・ダ・モンテフェルトロ（Federigo Montefeltro）指揮下の軍隊を派遣した。その結果、ヴェルテッラが降伏すると、傭兵隊達は、略奪をほしいままにした。そして、ヴェルテッラは、フィレンツェの支配下となった[13]。ローマでは、1471年に、シクストウス四世（SixtusⅣ、本名＝フランチェスコ・デラ・ロヴェーレ）が、教皇に即位した。ボローニアとリミニの間に位置する交通の要地の買収を巡って、ロレンツォは、この教皇と対立した。教皇は、それまでの親交のあったメディチ銀行との関係をやめ、フィレンツェではメディチ銀行と敵対関係にあったパッツィ（Pazzi）銀行へと切り替えた。パッツィ家は、古い家柄を誇る名門貴族で、新興家族のメディチ家を見下していた。パッツィ家は、フィレンツェにおける権力をメディチ家から奪うことを計画していた。パッツィ家の有力者フランチェスコ・デ・パッツィは、ロレンツォと弟のジュリアーノの暗殺を企てていた。その機会は、1478年４月26日に訪れた。フィレンツェの大聖堂サンタ・マリア・デル・フィオーレ（Duomo, Santa Maria del Fiore）を舞台として遂行された。しかし、この暗殺計画は失敗に終わった。ロレンツォの弟のジュリアーノは殺された。ロレンツォは傷を負ったが、運よく危機一

髪で逃れることができた。メディチ家の存亡を分けた一瞬であった。パッツィ家の当主ヤコポ・パッツィは、市庁前広場で市民に蜂起を呼び掛けたが、市民は応じなかった。ヤコポは、国外に逃亡した。首謀者フランチェスコ・デ・パッツィ以下、パッツィ家の家族達は処刑された。このパッツィ家の陰謀事件は、メディチ家が、一般市民の支持を得たという証となった[14]。しかし、パッツィ家を支持していたローマ教皇シクストウス四世は、メディチ家に対する怒りを増大させていた。教皇は、ロレンツォとフィレンツェ市政府を破門した。さらに、ナポリ国王とシエナとともに、フィレンツェに宣戦布告を宣言した。フィレンツェもこれに対抗して、ミラノやフランス王ルイ十一世に援軍を求めたが、うまくいかなかった。1479年12月、死を持ってフィレンツェを救う覚悟を決めたロレンツォは、巨額の賠償金を持って、単身ナポリへ行き、ナポリ王フェルディナンド（Ferdinand）と直接交渉を試みた。交渉はロレンツォにとって、最初は極めて不利であったが、約10週間後の1480年２月末に、フェルディナンド王とシクストウス四世との結びつきを切ることに成功した。そして、フェルディナンド王と平和条約を締結した[15]。ロレンツォは、1434年祖父コジモが、フィレンツェに帰還した時以上の熱狂で、市民に迎えられた。その後、フィレンツェにおけるメディチ家の支配体制は強化されていった。しかし、コジモが、経営能力を持ち、メディチ銀行を発展させたのに対し、ロレンツォは経営能力を有していなかった。また銀行経営に対して専念するという努力にも欠けていた。また、フィレンツェを襲った経済不況に対しても、これを克服するための努力は、一切しなかった。ピエロの時代に始まったメディチ銀行の衰退は、ロレンツォの時代になって、一層加速された。ただし、ロレンツォの

第１図　メディチ家の系図一覧表（抜粋）



時代、フィレンツェは芸術の光がさん然と輝いた。例えば、ヴェロッキオ、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ギルランダイオ、ボッティチェルリ、ポライウォーロ等後世に名を残す芸術家達が活躍した。一方これらの芸術家達の何人かが、国外に流出したことも事実であった。ロレンツォは、祖父コジモ、父ピエロと比較すると、政治的手腕、経営能力において劣っていた。しかし、文化人としての評価から、ロレンツォは、輝ける1400年代（クワトロチェント）の時代のメディチ家の中では最も才能豊かな魅力的な人物であったといえよう。ロレンツォは、1492年４月９日に没した。ロレンツォの後をついだのは、長男のピエロ（Piero）であった。ピエロは、健康で容貌も美しかったが、性格が弱く、忍耐力がなかった。しかも、庶民性にかけ、気位が高かった。1494年ナポリ王フェルディナンドが死ぬと、フランス王シャルル八世は、王位継承権を主張し、３万の大軍を率いて、アルプスを越え、ミラノを経て、フィレンツェ領に達した。我を失ったピエロは、フランス王に伺候し、ピサやリヴォルノの領有権を提供、多額の賠償金を申し出た。このピエロの屈辱的態度に、フィレンツェの市民は激怒した。フィレンツェ市政府は、メディチ家の永久追放を宣言した。長年築き上げてきたメディチ家の栄光は、ことごとく消え去った。60年間近く続いたフィレンツェにおけるメディチ家の支配は終わった。そしてメディチ家が、フィレンツェに復帰するには、18年（1512年）という長い歳月を待たねばならなかった。

第３節　1395年のメディチ銀行の元帳と複式簿記

フィレンツェ国立図書館には、アヴェラルド・デ・メディチ商会（Averardo de Medici e compagni）の1395年の元帳が保管されている[16]。このアヴェラルド・デ・メディチ商会は、上述したように、ジョヴァンニ・ディ・ビッチの兄フランチェスコが息子のアヴェラルドの名前で経営を開始した銀行である。この1395年の元帳は、メディチ家最古の会計帳簿と言われている[17]。しかし、この元帳は、完全な形では残されていない。１フォーリオ（fo.）から16フォーリオまでと110フォーリオ以後が紛失している。したがって94フォーリオ188頁しか残されていない[18]。そして、この元帳が、複式簿記で記録されているかどうかが、我々の最大の関心事であり、問題点となるのである。

この問題に対して、ズィーヴェキング（Sieveking）,チェッケレーリ（Ceccherelli）ベスタ(Besta)、ペンドルフ（Penndorf)、ゼルビ（Zerbi)、ルーヴァ（De Roover)、マルティネッリ（Martinelli）等がそれぞれの意見を論述している。まずこの1395年のメディチ銀行の会計帳簿を最初に発見したのは、ジェノヴァのカサ・ディ・サン・ジョルジョの研究で有名なドイツの経済史学者ズィーヴェキングである。ズィーヴェキングはこの元帳は複式簿記で記録されていると主張する[19]。さらに、イタリアの学者チェッケレーリも、このメディチ銀行の元帳は複式簿記を採用したと記述している[20]。イタリア会計学及び会計史の泰斗ベスタは、彼の名著『会計学』(La Regioneria）の中で、このメディチ家（della famiglia de Medici）のアヴェラルド・ディ・フランチェスコ・メディチ・コンパニアの1395年の元帳を調査・考察し、言及している。ベスタは、チェッケレーリの意見を紹介し、自らも賛成している。ベスタは、「アベラ

ルド・デ・メディチ商会が記録した1395年の元帳形式は複式簿記の特徴を有している」と記述している[21]。ドイツの著名な会計史学者ペンドルフは、1395年のアヴェラルド・デ・メディチ商会の元帳に、人名勘定、損益勘定を確認する。さらにこの元帳以外の関連する補助簿に商品勘定、現金勘定そして手形勘定等の存在を認める。そして複式簿記採用説を主張する[22]。これに対して、複式簿記ロンバルディーア起源説を主張するミラノ出身のゼルビは、この1395年から1396年にかけてのメディチ銀行の元帳に対して、複式簿記採用否定説を呈する。理由としては、現金取引に関する貸借の不均衡を挙げている[23]。

メディチ家の最大の研究者ルーヴァは、この1395年のメディチ家の会計帳簿に対して、次のような見解を述べている。この94フォーリオの現存する不完全な会計帳簿は、債権・債務の人名勘定、保険勘定、経営上の諸種の勘定、費用勘定、損益勘定を含んでいる。チェッケレーリは、アベラルド・メディチの元帳は複式簿記で記録されていると述べている。しかし、ゼルビは、現金取引の貸借不均衡を理由に複式簿記説を否定している。このゼルビの見解は十分とは言えない。しかし、ゼルビの見解を反証することも困難であるとして、複式簿記説に、疑問を呈する。しかし最終的には、1395年のトスカーナでは、ダティニ（Datini）商会が複式簿記を採用していたこと、さらには、その後の1425年から1426年にかけてのアヴェラルド・デ・メディチ商会では複式簿記を採用していたことをもって、1395年の帳簿に対して複式簿記採用説を認める[24]。

複式簿記起源論ジェノヴァ説をとるジェノヴァ出身のマルティネッリも、1395年のメディチ商会の元帳に対し、複式簿記肯定説をとる。マルティネッリは、この元帳を十分に調査し、研究した。そして元帳における左右貸借対照合計金額の一致、アヴェラルド・デ・メディチ勘定に対する利益勘定の振替、支出勘定、損益勘定、手数料勘定、保険勘定等の記録他をもって、この元帳が複式簿記で記録されていることを立証する[25]。

上述したように、この1395年の元帳には、28フォーリオの銀行の費用（spese di bancho）勘定、81フォーリオのアヴェラルド・デ・メディチ商会（Averardo de Medici e Compagni）勘定、36フォーリオのベルナルド・ディ・ジョルジョ（Bernardo di Giorgio）勘定をはじめとする多くの人名勘定、すなわち債権・債務勘定そして資本金勘定が記録されている。さらには、損益勘定、保険勘定、現金勘定、商品名商品勘定等の勘定も認められる。そして各勘定は、左側に借方を、右側に貸方を記入する左右貸借対照の形式で記録されている。貸借の用語は、借方はdeono（またはdee）dare,貸方はdeono（またはdee）avereで統一記入されている。この貸借形式と貸借用語は、ヴェネツィア商人の元帳及びパチョーリ簿記論とも類似点を見出す。すなわち、1395年のメディチ家の元帳は、借方と貸方による取引と勘定の二重性を有する。そして現金勘定、商品名商品勘定、債権・債務勘定及び資本金勘定という実在勘定（物的勘定を含む）、さらには損益勘定という名目勘定の記録の存在があった。まさに、メディチ家における複式簿記の採用は、14世紀末（1395年）に実現したことになるのである。

第４節　メディチ家の貸借対照表とカタスト

1427年5月フィレンツェ共和国の都市評議会は、新税制「カタスト」（Catasto）を採用することを決定した。本来、フィレンツェの税制は、消費税や関税等の間接税と強制国債を基とする財源に依存していた。しかし、フィレンツェを取り巻く状況はかなり厳しかった。ミラノのヴィスコンティ家は、北イタリアから中央イタリアまでその勢力を拡大しつつあった。これに対し、フィレンツェは、独立を維持するため戦わねばならなかった。戦争には莫大な資金を必要とした。従来の税制では、戦争に応じられなくなった。そこで、フィレンツェの政府は、カタストという新税制を導入した[26]。

このカタストとは、財産税または固定資産税の一種であった。このカタストの課税は、フィレンツェの都市のみならずコンタード（contado＝農村地域）、従属都市たるピサ、ピストイア、アレッツォ、プラート、ヴェルテッラ、コルトーナ等の六大都市にまで及んだ。

これらの地域の家族の戸主達は、不動産、現金、債権、公債、家畜等の資産及び債務等の負債等を評価・記録し、申告する義務が生じた。そして、資産から負債を差引いた資本に対して税金が課せられた。通例、税率は、７％程度であった。当時のフィレンツェの人口は37,000人、１万戸数であった。このうち課税対象とならない家は31％、すなわち課税対象となる家は69％であった。極めて裕福な１％の大家族、約100戸が、トスカーナ全資産の６分の１を占めていた。最も裕福な大家族は、順位からするとストロッツイ家、バルディ家、メディチ家、さらにはアルベルティ家、アルビッツィ家、ペルッツィ家等であった。この６つの大家族が、トスカーナの課税対象資産の10％以上に及んだ。有名なメディチ家も資産の額から見れば、第３位の位置にあったのである。

ペンドルフの研究によると、1427年のアヴェラルド・デ・メディチと1430年のコジモとロレンツォのカタストに対する財産申告書が残されている。

第２図の1427年のアヴェラルドの申告書では、資産17,433フローリン（f.）10ゾルディ（s.）６デナリー（d.）から、負債2337f.を差引いて資本15,096f.10s.6d.を算出している。

すなわち、フィレンツェの採用したカタストの税制に従って、財産申告書用の貸借対照表が、フィレンツェのメディチ家で作成された。また第３図の1430年のコジモとロレンツォの財産申告書では、資産112,993f.11s.4d.から負債25,545f.19s.5d.を差引いた金額87,447f.11s.11d.を資本金として算出している。そしてこの資本金を、カタストの課税対象金額として、5％の課税額437f.16s.9d.を算出している[27]。さらに、ルーヴァの文献に依存して、第４図の1433年3月30日のメディチ銀行の貸借対照表と秘密帳の残高表について解説を試みる[28]。1433年の貸借対照表は、資産総額153,052f.19s.7d.から、負債総額（117,557f.8s.9d.+800f.19s.7d.）を差引いて資本金34,694f.20s.3d.を算出した表である。ただ、貸借の合計金額を一致させるため残高計算上の誤差52f.3s.1d.を資産側に加算している。この貸借対照表を作成するために、N印の白色帳簿（Libro bianco）、M印の黄色旧帳簿（Libro vecchio giallo）等が記録されている。そして資本金額34,694f.20s.3d.の投資内容を明らかにするため、フィレンツェメディチ銀行秘密帳の

残高表が、別表第５図に作成されている。この表は、メディチ銀行の財政状態を明らかにするものである[29]。フィレンツェ本店の資本金は、14,000f.である。このうちの10,500f.はメディチ家のコジモとロレンツォそしてイラリオーネ・デ・バルディ商会の持分である。そして2,000f.はリパッチョ・ディ・ベネデット・デ・バルディの持分でる。さらに1,500f.はフォルコ・デ・アドアルド・ポルティナリの持分である。残りは、メディチ商会の支店及び代理店の持分及び1431年度未配当利益と貸倒引当金等である。

ルーヴァの研究によると、1481年以前まで、フィレンツェでは、カタストに累進課税の原理は適用されていなかった。しかし、それは知られていなかったのである。フィレンツェの権威者達は、1480年、カタストに累進課税の制度を採用することに決定した。いくつかの変更の後、1481年12月に累進課税の制度が採用された。第６図のロレンツォの1481年の税金申告書から多くのことを知ることができる。

まずロレンツォの全財産57,930f.7s.4d.から５％の管理費を差引いて、純財産の55,033f.16s.6d.を算出する。この純財産の７％の額3,852f.11s.4d.を算出して仮の１年間の収入額とする。特別経費、1,500f.を減額した後、2,352f.11s.4d.の課税対象額を算出する。この金額に22％の税率を課して517f.11s.8d.の税金とするのである。すなわち、純財産額（＝資本金額）に一定の率をかけて、年間収入額として、この収入額に税率をかけて税金支払額としたのである[30]。

第２図　1427年のアヴェラルド・デ・メディチの財産申告書

	f.	s.	d.
（資産）			
不動産	7,618	16	1
モンテ	5,733	12	3
企業資本	4,081	2	2
	17,433	10	6
（負債）			
家政費	1,400		
寄付金	937		
	−2,337		
（資本）	15,096	10	6

(27)

なお、メディチ家が採用した金額の貨幣単位は、フィレンツェが13世紀から16世紀初頭にかけて鋳造したフローリン（florinまたはfiorino）金貨であった。

１フローリン（f.）は、20ゾルディ（soldi＝s.）＝240デナリー（denari＝d.）と１フローリン＝29ゾルディ＝348デナリーの２つの貨幣単位が存在していた。

第３図　1430年のコジモとロレンツォの財産申告書

	f.	s.	d.
（資産）			
不動産	39,199	19	7
モンテ	29,040	17	7
企業資本	44,752	14	2
	112,993	11	4
（負債）			
債務、寄付、家政費	−25,545	19	5
（資本=課税対象金額）	87,447	11	11
税金（5%）	437	16	9

(27)

第４図　フィレンツェ・メディチ銀行の貸借対照表

1433 年 3 月 30 日

負　　債

借方残高

		f.	s.	d.	f.	s.	d. aff.
白色帳簿	N 印	119,781	16	9			
減額相互会計		−2,224	8	0			
					117,557	8	9
旧帳簿 M 印					800	19	7
秘密帳簿（＝資本金）					34,694	20	3
					153,052	19	7

資　　産

借方残高

		f.	s.	d.	f.	s.	d.aff.
白色帳簿	N 印				119,781	16	10
黄色帳簿	M 印	8,331	24	1			
減額相互会計		−2,224	8	0	6,107	16	1
秘密帳					27,111	12	7
残高誤差					153,000	16	6
					52	3	1
					153,052	19	7

(28)

第５図　フィレンツェ・メディチ銀行の秘密帳

1433 年 3 月 30 日

資本金（コルポ）

	f.	s.	d.	f.	s.	d.aff.
コジモとロレンツォ・デ・メディチ及びイラリオーネ・デ・バルディ商会	10,500	0	0			
リパッチョ・ディ・ベネデット・デ・バルディ	2,000	0	0			
フォルコ・デ・アドアルド・ポルティナリ	1,500	0	0			
				14,000	0	0
コジモとロレンツォ・デ・メディチ及びイラリオーネ・デ・バルディ商会の当座会計				15,500	11	9
1431 年の未配当利益				3,251	19	9
貸倒引当金				1,046	23	6
アニョロ・ディ・ロレンツォ・デラ・ステーファ				94	23	3
フランチェスコ・ディ・ジョバンニ ・ディ・グッチォ・ディ・リミニ				801	0	0
合計				34,694	20	3

(29)

第６図　1481年カタストによるロレンツォの税金申告書

	f.	s.	d.
全財産(Valsente=市価)	57.930	7	4
管理費のための 5%の減額	−2,896	10	10
純財産（市価）	55,033	16	6
年間収入額（純財産の 7%）	3,852	11	4
特別経費減額	−1,500	0	0
課税対象額	2,352	11	4
22%の税金額	517	11	8

(30)

第５節　メディチ銀行の損益計算

メディチ銀行の損益計算は、フィレンツェ国立古文書館に保管されている３冊のメディチ家の秘密帳から知ることができる。ルーヴァの文献に依存し、以下にその大要を論述する[31]。メディチ銀行は、1397年10月１日から1451年３月24日にかけての約54年間にわたる期間の損益計算の記録を残している。この３冊の秘密帳は、常にフィレンツェの本店で、パートナーズ（partners）によって記録された。この秘密帳を必要としない時には、通常鍵のかかった箱に保管されていた。この秘密帳の中には、投資家達の資本投資額及び利益配当額等の重要な情報が記録されていた。このような重要な情報は、事務所で働く人々の目からも隠すことは賢明であると考えられていた。時として、秘密帳には、経営者の報酬及び枢機卿、皇太子また政府高官のような著名人による預金等も記録されていた。このような著名人は、彼等の預金が世間に絶対に漏れないことを望んでいた。そしてメディチ銀行は、しっかりと秘密を守ったのである。したがって、彼等の信頼を十分得ていた。メディチ銀行は、秘密帳の中で銀行全体に関する会計を記録した。その中には、本店から支店への投資額及び支店から本店へ報告された各支店の損益計算が記録された。この本店の秘密帳以外に、各支店もそれぞれ、損益計算を記録した秘密の帳簿を保有していた。

メディチ銀行の現存する３冊の秘密帳は、幸運にも本店に保管されていた。この３冊の帳簿は、メディチ銀行全体の会計を記録していた。したがって、メディチ銀行の1397年から1451年

という長期にわたる財政上の完全な情報を知ることが可能となった。第７図と第８図に示した第１の秘密帳からは、1397年から1420年への23年間の損益計算が記録されている。さらに、この利益額の配当内容が記録されている。損益額は、フィレンツェの本店をはじめとしてローマ、ヴェネツィア、ナポリ等の支店別、金融業と貿易、さらに毛織物店１号と２号ごとに記録されている。23年間の利益は、ジョヴァンニ・ディ・ビッチ・デ・メディチとベネデット・ディ・リパッチョ・デ・バルディの２人の出資者に配分される。これは、出資額に応じて、ジョヴァンニ・ディ・ビッチには利益額の４分の３が、ベネデット・ディ・リパッチョ・デ・バルディへは４分の１が配当金として支払われている[32]。ベネデット・ディ・リパッチョ・デ・バルディは、1402年から1420年にかけてのメディチ家の総支配人である。

第９図及び第10図に示された第２の秘密帳からは、1420年から1435年にかけての15年間の損益計算と利益の配当内容を知ることができる[33]。15年間の利益は、メディチ家のコジモとロレンツォに３分の２が、３分の１がイラリョオネ・ディ・リパッチョ・デ・バルディに配当されている。この利益計算と利益配当計算は、1435年の決算時に遂行された。前回の1420年時のメディチ家の当主ジョヴァンニ・ディ・ビッチは、1429年に没している。したがって、当主の後を継いだ長男のコジモと次男のロレンツォが、メディチ銀行の共同代表の出資者となっている。またメディチ銀行の共同の外部出資者であったバルディ家のベネデット・ディ・リパッチョは1420年に没しており、その後を息子のイラリョオネ・ディ・リパッチョが、継いで出資者となった。したがって、利益配当を受領している。イラリョオネ・ディ・リパッチョ・デ・バルディは、1420年から1433年までのメディチ家の総支配人である。

第11図及び第12図に示された第３の秘密帳からは、1435年６月３日から1451年３月24日までの約16年間の損益計算と利益配当の内容を知ることができる。ただし、この16年間は、まず1435年６月３日から1441年３月24日までの５年10ヶ月の損益計算を実行する。次いで1441年３月25日から1451年３月24日までの損益計算を遂行する。そして1451年３月24日に、前期と後期の２つの期間の利益合計金額を算出している。しかし、利益配当の期間は、1435年から1443年と1444年から1450年と利益算定期間と一致していない。したがって、前期と後期の利益額と利益配当額は異なる[34]。しかし、最終の利益合計金額と利益配当額は一致する。前期（1435－1443）の利益配当割合は、メディチ家が６分の４、アントニオ・サルターティが６分の１、ジョヴァンニ・デ・アメリゴ・ベンチが６分の１それぞれを受領している。後期（1444－1450）では、メディチ家が４分の３をジョヴァンニ・デ・アメリゴ・ベンチが４分の１を受取っている。合計（1435－1450）での利益配当では、メディチ家が70％、アントニオ・サルターティが10％、ジョヴァンニ・デ・アメリゴ・ベンチが20％を受取っている。

アントニオ・サルターティは、1435年から1443年にかけて、またジョヴァンニ・デ・アメリゴ・ベンチは、1443年から1445年にかけてのメディチ家の総支配人である。損益計算は、各支店でも別個に遂行された。メディチ家の各支店は、本店とは別に独立した会計組織を有していた。各支店の支店長は、主として1年を単位として決算を実行した。その結果としての報告書は、本店に送付された。各支店の会計方法は、必ずしも、本店の形式を採用した訳ではない。

第７図　メディチ銀行の損益計算（1397－1420）

本店・支店	利益額		
	f.	s.	d.
フィレンツェ	25,344	10	4
ローマ	79,195	4	4
ヴェネツィア	22,705	9	7
ナポリ	15,458	25	7
ガエータの顧客	485	9	9
雑収入	159	22	3
金融業と貿易	143,348	23	4
毛織物店Ⅰ（コジモ・メディチとミカエル・ディ・バルド）	1,634	20	9
毛織物店Ⅱ（ロレンツォ・メディチとタダオ・ディ・フィリッポ）	6,837	9	3
製造業小計	8,472	1	0
計	151,820	24	4

(32)

第８図　メディチ銀行の利益配当（1397－1420）

名前	割合	金額		
		f.	s.	d.
ジョヴァンニ・ディ・ビッチ・デ・メディチ	$\frac{3}{4}$	113,865	18	5
ベネデット・ディ・リパッチョ・デ・バルディ	$\frac{1}{4}$	37,955	5	11
合計		151,820	24	4

(32)

例えば、ローマ支店の損益計算は、1439年から1450年の12年間にかけて８回の決算が遂行された。このうち、２年の期間が１回、３年の期間が１回あったが、他はすべて１年間に１回の決算であった[35]。ヴェネツィア支店では、1406年から1415年にかけての10年間に７回の決算が実行された。このうち、1410年から1413年という４年間の損益計算が遂行されたが、残りの６回は、すべて１年間を単位とする損益計算であった[36]。ブルージュ支店でも、1439年から1443年にかけて４回、1447年から1450年にかけて3回、他は毎年損益計算を実行している[37]。さらに、各支店は、それぞれ財産計算を行い貸借対照表を作成した実例が多く見られる。特にミラノ支店（1459年）とリヨン支店（1467年）が作成した貸借対照表は資産－負債＝資本、期末資本－期首資本＝純利益という計算方法をも遂行している[38]。この方式は、フィレンツェの一貴族であったアルベルティ（Alberti）家の1302年から1329年にかけて作成された10回の財務諸表とも共通の会計方式を持つ。また、ドイツの有名なフッガー家が作成した1527年以後の貸借対照表とも類似の方式が見られる[39]。この会計上の勘定理論は、19世紀後半、ドイツで花開いた

第９図　メディチ銀行の損益計算（1420－1435）

本店・支店	利益額		
	f.	s.	d.
フィレンツェ	17,823	5	0
ローマ	117,037	21	8
ジェノヴァ	20,605	3	11
ヴェネツィア	24,453	25	7
ナポリ	684	24	2
小計	180,604	22	4
毛織物店	5,777	22	6
合計	186,382	15	10

(33)

第10図　メディチ銀行の利益配分（1420－1435）

名前	割合	金額		
		f.	s.	d.
コジモ・ロレンツォ・デ・メディチ	$\frac{2}{3}$	124,255	1	2
イラリョオネ・ディ・リパッチョ・デ・バルディ	$\frac{1}{3}$	62,127	14	8
合計		186,382	15	10

(33)

ヒュックリ（Hügli, 1887年）そしてシェアー（Schär, 1890年）の主唱した物的二勘定系統説（Materialistische, Zweikonreihen－theorie）の萌芽ともいえるものである[(40)]。

そして各支店では、利益額の一部を支店長が受取り、残りの利益は他の投資家及び本店のメディチ家へと配当がなされている。ただし、支店会計は、当然本店の命令に従ったものもあるがその支店の存在する地方の会計慣習に従ったものもあって、必ずしもすべてが、本店のフィレンツェの会計慣習に従ったものとは言い難い。筆者の主張する複式簿記同時期説を基礎とすれば、ヴェネツィア支店ではヴェネツィアの簿記方式を、ローマ支店ではローマの簿記方式を、ミラノ支店ではロンバルディア方式を、またリヨン支店ではリヨン方式を採用したことは十分考えられる。15世紀のイタリアの都市国家ではフィレンツェのメディチ家のみならず、多くの商人達が同様の簿記方式を採用して損益計算を実行していたということは十分考えられることである。

第11図　メディチ銀行の損益計算（1435－1451）

本店・支店	利益額合計			1435.6.3－1441.3.24			1441.3.25－1451.3.24		
	f.	s.	d.	f.	s.	d.	f.	s.	d.
アンコーナ	5,116	0	0	4,168	0	0	948	0	0
アヴィニオン	8,948	14	6				8,948	14	6
バーゼル	5,065	0	6	5,065	0	6			
ブルージュとロンドン	17,788	12	8	2,350	0	0	15,432	12	8
フィレンツェ	24,568	5	7	2,200	0	0	22,368	5	7
ジェノヴァ	46,975	15	0	19,924	25	6	27,050	19	4
ピサ	1,000	0	0				1,000	0	0
ローマ	88,511	14	11	35,960	21	0	52,550	22	11
ヴェネツィア	63,319	16	11	27,740	1	10	35,579	15	1
小計	261,292	22	11	97,408	19	10	163,884	3	1
毛織物店Ⅰ(アントニオ・ディ・タデオ)	4,917	3	6	925	0	0	3,992	3	6
毛織物店Ⅱ（ジュンティーニと共同)	5,455	15	7	1,225	23	9	4,229	20	10
絹織物店	19,125	17	10	4,810	23	0	14,314	23	10
小計	29,498	7	1	6,961	17	9	22,536	19	2
合計	290,791	1	10	104,370	8	7	186,420	22	3

(34)

第６節　メディチ家の原価計算

15世紀のフィレンツェでは、毛織物工業と絹織物工業は、主要な二大産業であった。フィレンツェの大家族達は、広大な土地と建物を購入し、毛織物と絹織物の製造と販売を実行したので

第12図　メディチ銀行の利益配当（1435－1451）

本店・支店	合計			1435－1443			1444－1450		
	f.	s.	d.	f.	s.	d.	f.	s.	d.
メディチ家	203,702	13	7	115,126	19	7	88,573	23	0
アントニオ・サルターティ	28,781	19	4	28,781	19	4			
ジョヴァンニ・デ・アメリゴ・ベンチ	58,306	26	11	28,781	19	4	29,525	7	7
合計	290,791	1	10	172,690	0	3	118,101	1	7

(34)

ある。

メディチ家でも、ジョヴァンニ・ディ・ビッチが、1402年に、毛織物製造のために、私財を投入したという事実がある。この目的を達成するため、ジョヴァンニは、経験豊かなミケーレ・ディ・バルド（Michele di Baldo）と会社契約を結んでいる[41]。ルーヴァの説によると、1445年頃のメディチ家の銀行業と織物製造業は、コジモを当主として、その下に、総合マネージャー兼パートナーであるジョヴァンニ・デ・アメリゴ・ベンチ（Geovanni d'Amerigo Benci）の管理の元に実行されていた。毛織物業については、２つの合名会社（または組合）によって組織化されていた。第１は、アントニオ・ディ・タデオ（Antonio di Taddeo）を管理者とする商会である。そして第２は、アンドレア・ジュンティーニ（Andrea Giuntini）を管理者とする商会であった。

第１のアントニオ・ディ・タデオによる商会は、1480年頃まで続いた。第２のアンドレア・ジュンティーニによる商会は1469年頃までしか続かなかった[42]。

絹織物製造については、メディチ家がいつ開始したかは明らかではない。しかし、1438年頃、メディチ家は、絹織物商会経営のマネージャーとしてフランチェスコ・ベルリンギェリ（Francesco Berlinghieri）とアシスタント・マネージャーとしてヤコポ・ディ・ビヤジョ・タングリア（Jacopo di Biagio Tanaglia）と契約を結んでいる。そして、1445年前後のメディチ家では、フランチェスコ・ベルリンギェリの息子ベルリンギェリ・ディ・フランチェスコ・ベルリンギェリ（Berlinghieri di Francesco　Berlinghieri）とヤコポ・タングリアの２人のマネージャーと契約を結んで、経営を遂行している。

メディチ家の毛織物及び絹織物の製造は、近代的な工場制度で実行されたわけではない。当時

第13図　コジモ・メディチとミケーレ・ディ・バルトの毛織物商会の損益計算（1402－1420）

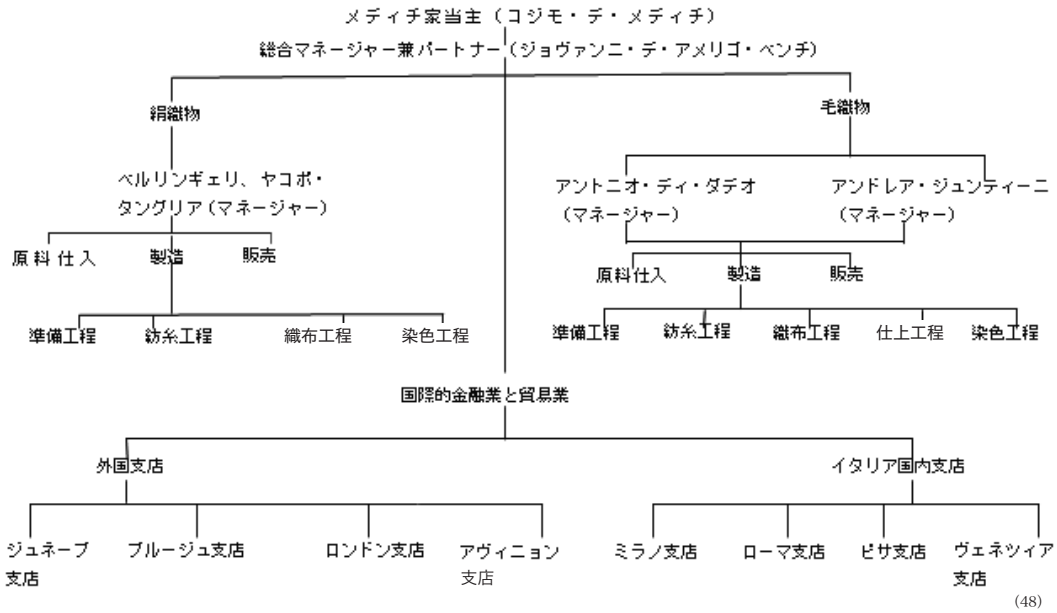
	会計期間	月数	損益計算		
			f.	s.	d.
A	1402 年 4 月 1 日―1404 年 12 月 31 日	33 ヶ月	1,150	11	0
B	1405 年 1 月 1 日―1407 年 9 月 6 日	32 ヶ月	1,854	6	0
C	1407 年 9 月 6 日―1408 年 5 月	9 ヶ月	1,111	9	6
D	1408 年 5 月―記録なし		864	0	8
E	記録なし―1415 年 3 月 25 日		1,939	26	8
F	1415 年 3 月 25 日―1420 年		1,862	2	0
	総利益		8,781	26	10
	調整損失		―1,736	15	6
	期間純利益		7,045	11	4

(47)

のフィレンツェの他の商会と同様に家内制手工業を中心として遂行された。２つの製造業は、原料仕入、製造、販売という３つの工程から成り立っていた。さらに製造工程については、毛織物の場合は、(1) 準備工程（繊維の選別と清浄化)、(2) 紡糸工程（繊維を引き伸ばし撚りをかけて原糸をつくる)、(3) 織布工程（紡糸を組み合わせ生地を織る)、(4) 仕上げ工程、(5) 染色工程という5つの工程から製品化された。また絹織物の場合は、(1) 準備工程 (2) 紡糸工程 (3) 織布工程 (4) 染色工程の４つの工程から製造された[43]。

ポール・ガーナーは、メディチ家が、ドイツのフッガー家と同様に、初期の原価計算の記録を残していることを指摘している[44]。メディチ家は、前述したように銀行業で有名であるが、長年にわたり、毛織物と絹織物の製造に従事していた。この製造活動を実行するために、会社（または組合）組織が採用された。これらの活動を記録するための会計帳簿として、多くの仕訳帳、元帳、その他の記録等々が用いられた。これらの会計帳簿は、ハーヴァード大学のセルフリッジ・コレクション（the Selfridge Collection）に保管されている[45]。そして、この製造に関する会計記録は、かなり正確に実行された。すでに1431年には、４冊の会計帳簿が採用された。

第14図　1455年頃のメディチ銀行内部組織図



(48)

第１が棚卸帳、第２が現金帳、第３が収入・支出帳、第４が賃金帳である。第１の棚卸帳には、毛織物に必要な羊毛、明礬、染料等の仕入れ費用が記入された。第２の現金帳には、現金の出納が記録された。第３の収入・支出帳には、毛織物の売上高や費用額が記された。第４の賃金帳には、職人への手間賃他等が記入された。そして、この４冊の会計帳簿から元帳への転記が行われた。

ガーナーによると、織物の製造と完成を記録する目的で、製造中の布地（panni lavorati）と完成品（finiti）という勘定が採用されていた。この記録は、メディチ家の会計担当者が製造原価に対する近代的概念に精通していたことを示すものである(46)。

またエドラー（Edler Florence）によると、売却された各織物勘定の借方には、(1) 仕入れた羊毛の総額、(2) 染料と染色に要した費用、(3) その他の製造にかかった費用等の合計額が記録されている。まさに、15世紀のメディチ家においては、製品の原価計算が確立していたことになる。

ルーヴァーによると、上述したコジモ・メディチとミケーレ・ディ・バルド共同の毛織物商会の1402年から1420年にかけての損益計算の記録が、フィレンツェの国立古文書館に保管されている(47)。この記録によると1402年から1420年までの18年間を、A, B, C, D, E, Fの６つの期間に分け、それぞれの期間の利益額を計算する。そして総合計金額8,781フィオーリ（f.）26シリング（s.）10デナリィ（d.）を算出する。

そして、この18年間の損失額－1,736f.15s.6d.を、損失調整額として差引いて、期間純利益

7,045f.11s.4d.を算出しているのである。

第７節　あとがき

本稿では、まずフィレンツェを中心に活躍したメディチ家の繁栄と廃退の歴史を論述した。それは、ヴィエリーリ・ディ・カムビオ・ディ・メディチが銀行を開いた14世紀前半を出発点とし、1494年にピエロを中心とするメディチ家がフィレンツェから追放されるときをもって終わりとした。しかし、実際には、メディチ家は、完全に消滅したわけではなかった。1512年、ロレンツォ・イル・マニフィコの次男ジョヴァンニと三男ジュリアーノは、フィレンツェに帰国する。そしてフィレンツェの政治を1494年以前に復帰させるのである。そして、半年後の1513年に教皇ユリウス二世が没した後、ジョヴァンニはレオ十世として教皇となる。そしてピエロの息子ロレンツォがメディチ家の当主となる。なお、教皇レオ十世は、フッガー家をはじめとする多くの銀行家から、高利で借金をした。その返済のため免罪符を発売した。そのため、1517年10月31日、マルティン・ルターは、ヴィッテンベルグの城門に95ケ条の質問状を貼付した。これこそプロテスタント誕生を生んだ宗教改革の始まりであった[49]。

そして、メディチ家は、またフィレンツェを中心として繁栄と廃退の波の中で大きく揺れ動くこととなるのである。

なお、本稿では、メディチ家の金融業と織物業のみについて論述した。しかし、内陸都市といわれるフィレンツェも、1406年にピサを征服し、1421年には良港リヴォルノをジェノヴァから購入した後、地中海貿易に進出した。当然メディチ家も地中海貿易を中心に外国に支店を置き、海外貿易に活躍の場を見出したのである[50]。メディチ家が、複式簿記を採用した時期については、1395年のアヴェラルド・メディチの元帳に示された会計実務に求めるという説がきわめて有力である。すなわち、メディチ家は、1395年以後、複式簿記を会計帳簿に採用したという説である。この説は、ズィーヴェキング、チェッケレーリ、ベスタ、ペンドルフ、ルーヴァ、マルティネッリ等有名な会計史学者等によって賛同された。もちろん、メリス、カスラーニ他等の研究によれば、フィレンツェを中心とするトスカーナでは、レニエリ・フィニィ（1296-1305年）、ファロルフィ（1299-1300年）、ペルッツイ（1335-1343年）、デル・ベーネ（1318-1324年）、コボーニ（1336-1340年）、アルベルティ（1302-1348年）等の会計帳簿の中で複式簿記が採用されていた[51]。したがって、1359年以後のメディチ家で複式簿記を採用していたことは当然のことである。1427年にフィレンツェが、国税増収のためカタストを採用したことは、会計史上極めて重要な出来事であった。この税金は、純資産すなわち家の資本に課税されるものであった。したがって、フィレンツェを中心とする家族達は、全財産を評価する義務が生じた。すなわち、資産（積極財産）－負債（消極財産）＝純資産（資本）という等式に従った評価計算が遂行されたのである。この為に多くの家族で、多くの貸借対照表が作成されたのである[52]。

メディチ家では、1397年から1450年にかけて遂行された損益計算の記録が残されている。54年間を、４期に分け、23年間、15年間、６年間、10年間という長期にわたる損益計算である。この損益計算は、支店別、製造業別に記録されている。しかし、各支店及び製造業では、毎年、

または２年から４年にわたる短期間の損益計算を実行した。そしてこの利益額を各支店、投資家達に配当し、ある一定の割合の金額が本店に送付された。ここでは本支店連結の会計組織が見られる。長期にわたる損益計算は、フッガー家と同様である。ただし財産目録法によって貸借対照表を作成し、資本の増減によって損益計算を実行したフッガー家とは計算組織が異なる。メディチ家では、金融業以外にも、毛織物、絹織物の製造が遂行された。この製造業の損益計算のためには、原価計算が実行された。その会計帳簿が、我々に残されている。これは、初期の原価計算の萌芽の一つである。

現在、花の都フィレンツェには、ルネサンス文化が栄華を極めた多くの美術品が残されている。特に、ウフィーツィ美術館をはじめとするフィレンツェの美術館、博物館にはメディチ家が集めた多くの展示物が飾られている。また、メディチ家の霊廟サン・ロレンツォ教会、メディチ・リッカルディ宮殿、メディチ家礼拝堂等の建物にフィレンツェを訪れた我々は絢爛豪華な多くの展示品に目を奪われる。そして我々は、フィレンツェを中心として活躍したメディチ家の存在を十分知るところとなる。しかし、その裏に隠された成功への闘争と敗北の歴史をも知らねばならない。そしてメディチ家成功の基礎を支えた会計の役割をも十分に理解すべきである。

(注)

(１) Brucker, Gene, *Florence The Golden Age, 1138-1737*, London, 1998, p.74. 清水廣一郎『中世イタリア商人の世界』平凡社、1982年、190-191頁。

(２) Bec, Christian, *Le siècle des médicis*, 西本晃二訳『メディチ家の世紀』白水社、1980年、16-17頁。

(３) 清水廣一郎『イタリア中世の都市社会』岩波書店、1990年、69頁。

(４) Brucker, Gene, op.cit., pp.84-92.

(５) モンタネッリ／ジェルヴァーゾ著、藤沢道郎訳、『ルネサンスの歴史（上）』中央公論社、1981年、197-199頁。

(６) De Roover, *The Rise and Decline of The Medici Bank, 1397-1494*, New York, 1963, p.35. ブルッカーもルーヴァと同じ見解を示す。Brucker, op.cit., p.92.

(７) De Roover op, cit., p.40, ASF, MAP, 133綴じ（filza), no.1

(８) De Roover, op.cit., p.37.

(９) 中嶋浩郎『メディチ家―古都フィレンツェと栄光の「王朝」』河出書房新社、2000年、28-30頁。

(10) De Roover,op.cit.,p.51.

(11) Hibbert, Christopher, *The Rise and Fall of the House of Medici*, 1974, 遠藤利国訳『メディチ家の盛衰（上）』東洋書林、2000年、36-37頁。

(12) De Roover, op, cit., pp.69-70.

(13) Hibbert, op.cit., 遠藤訳161-163.

(14) 清水廣一郎編訳『ロレンツォ・デ・メディチ、ルネサンスの擁護者』平凡社、1979, 26-28頁。

(15) ナポリ王フェルディナンド（Feridando）一世（1423-1494、在位1458-1494）は、アラゴン家出身の王で、フェランテとも呼ばれた。1442年父がナポリを征服してナポリ王になった時、カラブリア公となった。1458年父が没したので一世に即位した。Antonetti, Pierre, Histoire de Florence, 中島・渡部訳『フィレンツェ史』白水社、1986年、96-99頁参照。

(16) Martinelli, Alvaro, *The Origination and Evolution of Double Entry Bookkeeping to 1440*, Texas,1974, p.676.

(17) Penndorf, Balduin, *Lucca Pacioli Abhandlung über die Buchhaltung 1494*, Stuttgart, 1933,S.21.
(18) Martinelli, op.cit., p.677.
(19) Sieveking, Heinrich, *Die Handlungsbücher der Medici*, Wien, 1906.S.8.
(20) Ceccherelli, Alberto, *I Libri di mercatura della Banca Medici, e L'applicatione della partita doppia a Firenze nel secolo* XIV, Firenze, 1913.p.62.
(21) Besta, Fabio, La *Ragioneria, Generale*, Volume Ⅲ, Milano, 1922-1929, pp.321-325.
(22) Penndorf, a.a.O., S.23.
(23) Zerbi, Tommaso, *Le Origin della Partita Doppia*, Milano, 1952, p.125.
(24) De Roover, Raymond, "The Development of Accounting Prior to Luca Pacioli, According to the Account-books of Medieval Merchants" in Littleton and Yamey eds., *Studies in the History of Accounting*, London, 1956, pp.146-147.
(25) Martinelli, op.cit., pp.676-688.
(26) 清水廣一郎『イタリア中世の都市社会』岩波書店、1990年、19-20頁。
(27) Penndorf, a.a.O.SS.25-26. 第２図及び第３図の財産申告書はペンドルフの文献を参照して筆者が作成したものである。
(28) De Roover, " The Development of Accounting prior to Luca Pacioli," pp.149. 第４図の表は、フィレンツェ国立古文書館（S.A.F）にカタスト（catasto）No.470, 541フォーリオ以後として保管されている。
(29) De Roover, op.cit., p150.　第５図の表は、フィレンツェ国立古文書館のカタストNo470の546フォーリオに保管されている。
(30) De Roover, *The Rise and Decline of the Medici Bank*, p.29. 第６図の表は、フィレンツェ国立古文書館1481年のカタスト、No.1, 016, 476フォーリオ、ロレンツォ・デ・メディチの記録として保管されている。
(31) De Roover,The Rise and Decline of the Medici Bank, pp.35-76。
(32) De Roover, op.cit., p.47. 第７図及び第８図の表は、フィレンツェ国立古文書館（ASF)，153filza, no.1, 秘密帳1397-1420に記録・保管されている。
(33) De Roover, op.cit., p.55. 第９図及び第10図の表は、ASF, MAP, 153, no.20として保管されている。
(34) De Roover, op.ct., pp.69-70. 第11図及び第12図の表は、ASF, MAP, 153綴じ、秘密帳no.3, 1435-1450として保管されている。
(35) De Roover, op.cit., p.218.
(36) De Roover, op.cit., p.242.
(37) De Roover, op.cit., pp.322-323.
(38) De Roover, op.cit., pp.264-265. p.292.
(39)　拙著『ドイツ簿記史論』森山書店、1994年、24-53頁。
(40) 拙稿「ドイツ勘定学説に関する一考察」大東文化大学経営学会『経営論集』第６号、2003年９月、25頁。
(41) De Roover, op.cit., p.42,49.
(42) De Roover, op.cit., p.167.
(43) De Roover, op.cit., p.83.
(44) Garner, Paul, *Evolution of Cost Accounting to 1925*, Alabama, pp.7-15.
(45) Garner, op.cit., p.7.
(46) Garner, op.cit., p.9.
(47) De Roover, op.cit., p.173. 第13図は、ルーヴァの資料を基に筆者の作成したものである。ASF.MAP, filza153, no.1.
(48) De Roover,op.cit.,p.83. 第14図は、ルーヴァの作成した表を基に筆者が作成しなおしたものである。

(49) レオ十世は、1514年、ルカ・パチョーリをローマ大学の教授として招いたことでも有名である。レオ十世の詳細は、次の文献を参照されたい。拙著『イタリア簿記史論』森山書店、1988年、135-136頁。

(50) 木村尚三郎編『中世ヨーロッパ』清水廣一郎稿第３章「地中海貿易とガレー船」有斐閣、1980年111-113頁。

(51) トスカーナにおける複式簿記については、拙稿「複式簿記起源論再考」大東文化大学経済学会『経済論集』第110号、2018年９月、64-75頁を参照されたい。

(52) 資産、負債、資本に関する勘定学説については、拙稿「ドイツ勘定学説に関する一考察」24-28頁を参照されたい。